

都落ちしたはずの忠度が三位俊成卿の門を叩く

(忠度は)侍五騎、童一人、わが身ともに七騎取つて返し、五条の三位俊成卿の宿所におはして見給へば、

三位俊成卿……藤原俊成。『千載集』の撰者
藤原定家は俊成の子。

災いが飛び火することを恐れて忠度を邸に入れまいとする人々

門戸を閉ざして開かず。忠度。」と名のり給へば、落人帰り来たり。」とてその内騒ぎ合へり。

忠度の訪問を知って快く対面する俊成卿

(俊成卿は)「……その人ならば苦しがるまじ。入れ申せ。」とて、門を開けて対面あり。「この体、何となうあはれなり。」

自身の末路を覚悟した上で俊成卿に歌を託す忠度

(忠度が俊成卿に)「……一門の運命はや尽き候ひぬ。撰集のあるへきよし承り候ひしかば、生涯の面目に、一首なりとも御恩をかうぶらうとて」一首であつても勅撰集に入撰していただこうと(存じて候ひし)やがて世の乱れ出で来て、その沙汰なく候ふ奈、ただ一身の嘆きと存ずる候ふ。世静まり候ひなば、(自分の死後、平和が訪れたならば)勅撰の御沙汰候はんずらん。「これに候ふ巻き物のうちになさりぬべきものは」勅撰にふさわしい歌がございましたならば、(一首なりとも御恩をかうぶつて)草の陰にても(墓の下であつても)うれしと存じ候はば、遠き御守りでこそ候はんずれ(あの世から俊成卿をお守りしませう)う。う。う。……秀歌とおほしきを百余首書き集められたる巻き物を、……繼の引き合はせより取り出でて、俊成卿に奉る。

忠度の願いを快諾する俊成卿

(俊成卿は)「これを開けて見て、かかる忘れ形見を給はり置き候ひぬるうへは、ゆめゆめ疎略を存すまじう候ふ」(決していい加減に扱ふことはありません)。

願いが聞き届けられて晴れ晴れとした気持ちで都落ちする忠度

薩摩守喜んで、「今は西海の波の底に沈まば沈め(沈むならば沈むがよい)、山野にかばねをさらさらせ(死骸を曝すならば曝せばよい)。浮き世に思ひ置くと候はず(この世に思い残すことはありません)」。とて、馬に乗り甲の緒を締め、西をさして歩ませ給ふ。